

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 44

西摂の古代寺院 1 — 猪名寺廃寺 —

寺岡 洋

はじめに

前々号、「40回の連載目録」を作ってみると、なぜかご近所である摂津の古代寺院が登場していない。今回は自転車で出かけられる阪神間の古代寺院を紹介しします。



西摂は大阪平野の西北部になり、東を千里丘陵、西を六甲山地、北を北摂山地、南は大阪湾に面したおおよそ東西10km、南北13kmの平野部を呼ぶそうだが、阪神間は六甲山地の南麓で雰囲気少し異なる。

摂津国は13郡(78郷)からなり、淀川右岸に9郡、左岸に4郡(西成・東成・住吉・百済)が位置する。

西から八部(やたへ)郡、菟原(うはら)郡、武庫郡、河辺郡、武庫川上流の有馬郡(ここまでが兵庫県)、これに大阪府域になる豊島(てしま)郡・能勢郡までを西摂と呼んでいる。摂津国の西端は須磨で、垂水や塩屋は播磨国赤石(明石)郡になる。

狭義の白鳳時代(673~710)から奈良時代、阪神間には三田市も含め、古代寺院はわずかに5ヶ寺しか知られていない。栄根寺(えいこんじ)廃寺(川西市)については、「瓦窯か?」という説に依る。

猪名寺廃寺(尼崎市) 伊丹廃寺(伊丹市)
芦屋廃寺(芦屋市) 金心寺廃寺(三田市)
房王寺廃寺(室内遺跡 神戸市)

これに大阪府域に所在する

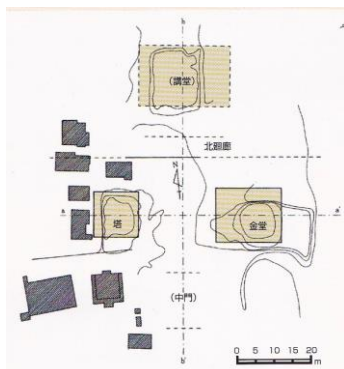
金寺山(かなでらやま)廃寺(豊中市)
石積廃寺?(池田市) *平瓦・丸瓦散布地
大里(おおさと)廃寺(能勢町)

を加えても8ヶ寺と、極めて少ない。武庫郡になる西宮市域には古代寺院が確認されていない。水陸交通の要衝である武庫郡に建立されなかったのは不可解だが、瓦の散布地も知られない。

猪名寺廃寺

所在地

尼崎市猪名寺、旧猪名寺字左璞丘(さぼくがおか)、猪名川の分流である藻(も)川右岸(西岸)に接した低台地先端(海拔11m)に位置し、猪名川流域を見渡せる。JR宝塚線・猪名寺駅が



ら至近。旧地名の左璞丘の左璞は、左大臣の唐風呼称である左璞野(さぼくや)と関連するらしい。

周辺寺院は、金寺山(新免)廃寺が東北へ4km強、伊丹廃寺は北方約3km強。これ以外に、行基(ぎょうき)が作った施設(院)が2ヶ所あった。天平2年(730)に、楊津院(やないついん)〔河辺郡楊津村〕。翌年、昆陽池周辺〔河辺郡山本村〕に昆陽施院(こやせいん 昆陽池院か)が設立されている。(左図を参照)

周辺は遺跡が多く、寺址からも各時代の遺物が出土している。円筒埴輪片が多く出土しており、古墳をつぶして寺域を整備したようである。前方後円墳が集中するもこの地域である。東へ1.2km、猪名川左岸沿いには九州系弥生人の集落跡・木棺墓群などで知られる田能(たのう)遺跡(国史跡)・田能資料館が所在する。

川沿いに建つ古代寺院は比較的めずらしく、類例としては加古川西岸に接して立地する河合廃寺(小野市/賀毛郡)がある。立地に意味があったのかも知れない。

猪名寺廃寺については、二回(1952・1958年)寺域の確認調査が行われた。遺構の位置は分かりにくい。

(右図 北回廊の瓦積基壇)

遺構

寺域は東西160m前後、南北は不明だが、方一町半程度と推測され、左璞丘が寺域と重なるようである。

伽藍配置は法隆寺式と呼ばれるもので、西に塔、東に金堂が共に南面して建つ。中門から伸びた回廊が金堂・塔を囲み、講堂は回廊の外(北側)に配される(左欄に伽藍配置図)。

金堂の規模は、推定18×14m、基壇は凝灰岩切石を使用した格式高い壇上積基壇である。金堂北辺には階段の最下段が残っていた。

塔は一辺約12m、やはり壇上積基壇と推定される。塔心礎は広場の傍らに移されており、長辺2.35m、短辺1.90mの花崗岩の巨石で、心柱穴(74cm)がみられる。塔と金堂の基壇間の距離は約20mもある。

講堂址は後世の攪乱がひどく、創建当初に遡る遺構は確認されなかったが、創建時に使用された川原寺式軒丸瓦や鴟尾(しび)がみつきり、同じ位置にあったと推定。

中門は北辺のみが検出され、詳細は不明。

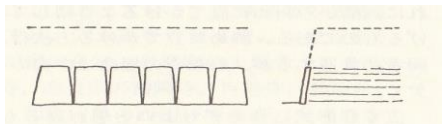
北回廊では、瓦積基壇(右図)が確認された。回廊南辺のみのようである。



「瓦列は途中とぎれながらも約19.85m続いている」、「この瓦列は、平瓦の凸面を外側にして横に並べ、……さらに平瓦の凸面を上にしてしきつめたものである」、「一種の瓦積基壇で、高さ約20cm程度のものであったと推定された」〔尼崎市1984〕。

塔跡西側の推定回廊跡からも、「中央の栗石層と、その東西各々約7尺の幅の瓦列層」が確認されている。「法園寺住職の談によれば、戦時中庫裏西南に防空壕を掘った際、前者同様の瓦列層があらわれた」そうで、西側回廊も瓦積基壇であった可能性が高い。ちなみに、瓦積基壇は渡来系寺院の特徴に挙げられている。

瓦積基壇は平瓦を重ねるのが一般的で、ごく稀に基壇下部に



縦に置いて横列に並べる例(垂直横列式 上図)があるが、「横向きに並べる」使い方(前頁)は類例を知らない。縦向きに並べるのは百済の最後の都である泗泚(しひ 扶餘)の軍守里廃寺や安芸・横見廃寺で見られる。

横見廃寺(三原市)は、大和の渡来系寺院として知られる檜隈寺(ひのくまでら)や呉原寺(くれはでら)と同范の軒丸瓦が出土している。花卉の子葉の先端に光芒(火焰紋)をあしらった特異な文様で、火焰紋は金銅仏の蓮華座に類例がある〔上原1996〕。

平瓦を基壇下部に立て並べるのは、基壇の補強対策ともみなされるが〔網2005〕、猪名寺廃寺の回廊の基壇は金堂や塔の基壇に較べ低いので強度については問題なく、基壇を切石風に化粧したのであろうか。

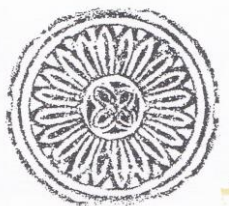
遺物

出土遺物の殆どが瓦類で。古代の瓦は、軒丸瓦8種類ほど、軒平瓦6種類ほど、丸・平瓦、鴟尾(しび)がある。主要な軒丸瓦は典型的な川原寺(かわらでら)式軒丸瓦(次頁)であるが、范(木型)は異なる。四重弧紋軒平瓦とセットになる。鴟尾も川原寺出土例と酷似する。

川原寺は、7世紀後半に天智天皇(在位 662~671年)の発願により創建されたと考えられており、複弁の軒丸瓦が初めて登場した。

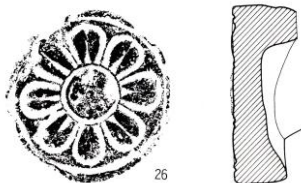
創建時の軒丸瓦は中央直結のデザインが主であるが、新羅系文様をもつ軒丸瓦も出土している。

「細弁20弁に復元されている軒丸瓦は、中房に四弁の小花紋をおく新羅の影響が感じられる例」〔大脇2015〕である。



(中房に四弁の小花紋)

いわゆる「高句麗系軒丸瓦」と呼ばれる大和・豊浦寺(とゆらでら)式の軒丸瓦も出土している。名称に高句麗系とあるが、新羅系とみなす人が多い。



(いわゆる「高句麗系軒丸瓦」)

「豊浦寺V型式の連弁を陰陽逆にしたものと考えられる。瓦当径は小さいが厚くなり、時期的にかなり下るものと考えたい」〔上田2000〕とされる。

豊浦寺の軒丸瓦は隼上(はやあがり)瓦窯(宇治市)で焼かれており、秦氏が関わっているようである。猪名寺廃寺の軒丸瓦を焼いた瓦窯は見つかっていない。

瓦から猪名寺廃寺をみると、「この寺の創建が7世紀後半に遡ること、軒瓦のセットと共に飛鳥の都と密接つながりがあったことを証している」〔大脇2015〕と評価される。猪名川流域に飛鳥(ヤマト王権)とネットワークをもつ氏族、さらに新羅や百済の寺院についても情報をもつ渡来系氏族・集団の関与が想定される。

創建氏族・造寺集団

1923(大正12)年に踏査され、発掘調査にも参加された石田茂作氏は、「為名真人(いなまひと) 或いは為名部首(いなべのおびと) と関係のあった寺院と見られないか」〔石田1936〕とされた。その他、法道仙人と左大臣・阿倍内麻呂



(倉梯麻呂)、川原公(かわはらのきみ)などが挙げられている。このうち、阿倍内麻呂は左大臣(左璞野)からの連想で猪名寺廃寺の創建年代と合わない。

威奈(猪名とも表記)真人は、「真人」という最高位の姓(かばね)を持ち、官人としても名前を残しており、中央直結の川原寺式軒丸瓦を使用したかもしれない。

ただ、猪名川流域に居住していたかどうかは不明で、「威奈真人大村」の蔵骨器(上図)墓誌銘では、「大倭国葛木下郡山君里狛井山崗(香芝市穴虫付近)」に葬られており、本貫地は大和である。通説では、威奈氏の本拠は猪名県(いなのがた)、のちの河辺郡為奈郷とされる。

川原公については、伊丹廃寺の建立を主導した氏族とされており、伊丹廃寺を紹介する際、取り上げる。

『住吉大社神代記』(編纂は平安時代初か)には、「(為奈河)河の辺に昔、山直阿我奈賀(やまのあたひあがなが) 居りき」とあり、山直氏の居住が確認できる。山直は播磨においても多くの寺院の建立に関わっており、猪名川流域でも造寺に「知識」として加わっていることが考えられる。

(右図 墨縄)

猪名部首(いなべのおびと)

猪名部の始祖は新羅王が派遣した工匠で新羅系であるが、百済系もいる。猪名部は古代の木工・船大工として知られる。



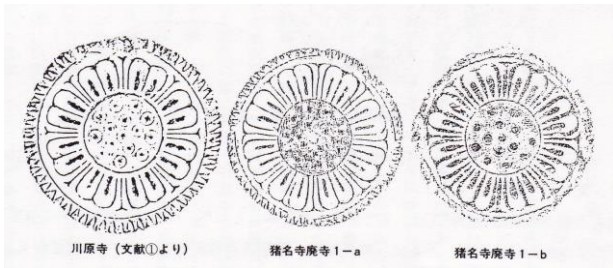
名工として聞こえた「木工(こたくみ) 韋那部真根(いなべのまね) が采女(うねめ)の裸相撲を見せられ、思わず手元が狂った逸話は名高い〔雄略紀十二年条〕。

この話の続きに、「墨縄(墨壺)」が登場する。猪名川中流の栄根(さかね)遺跡(JR宝塚線・川西池田駅周辺)では、8世紀のものとされる墨縄が出土しており、発掘資料としては日本最古級になる〔神谷1999〕。

猪名部は移住の経緯からみて、武庫水門(むこのみなと 猪名川河口か?)が本拠であろうが、伊勢をはじめ丹波・近江・越前・隠岐など、各地に広がっている。2016年夏の甲子園には「いなべ総合学園高校(三重県いなべ市員弁(いなべ)町)」が出演している。猪名部と秦氏は近縁氏族と考えられている〔寺岡2014〕。

■引用・参考文献

石田茂作 1936『飛鳥時代寺院址の研究』
 尼崎市教育委員会 1984『尼崎市猪名寺廃寺跡』

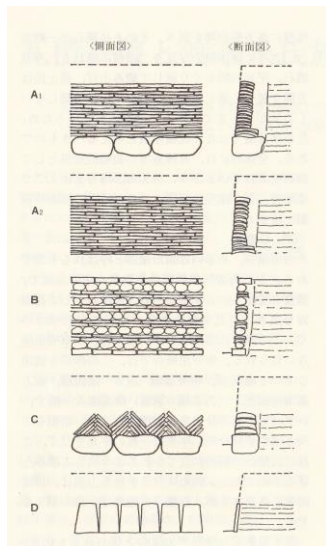


*川原寺出土軒丸瓦と猪名寺廃寺出土軒丸瓦

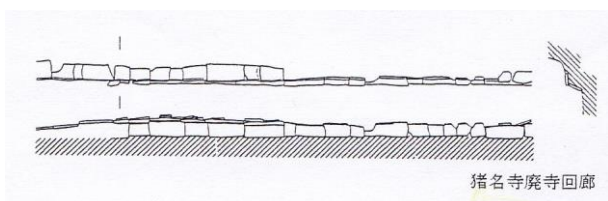


*猪名寺廃寺 塔心礎 (右端に舍利孔?)

上原真人 1996『蓮華紋』日本の美術359 至文堂
 田辺征夫 1997「瓦積基壇と渡来系氏族」
 『季刊考古学』60 雄山閣出版

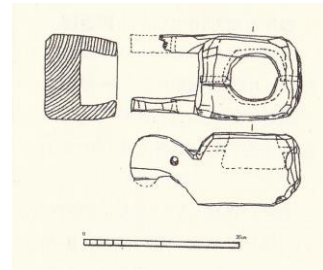


*瓦積基壇の諸形式 (田辺征夫)



(上図) 市元芳三1989「瓦積基壇にみる古代寺院の様相」
 『大阪文化財論集』大阪文化財センター

神谷正弘 1999「出土・伝世品から見た日本の墨壺」
 『萩田昭次先生古稀記念』



* 栄根遺跡出土 墨壺 (墨壺)

上田 睦 2000「摂河泉の高句麗系軒丸瓦」
 杉本 宏 2000「隼上り瓦窯跡と山背の高句麗系軒丸瓦」
 花谷 浩 2000「豊浦寺の高句麗系軒丸瓦」
 上記3編『古代瓦研究 I』奈良国立文化財研究所
 伊丹市立博物館 2001
 『発掘された寺院 ～西摂を中心に～』
 伊丹市立博物館 2009『古代の猪名野
 伊丹台地に刻まれた開発の歴史』
 網 伸也 2005「日本における瓦積基壇の成立と展開
 一畿内を中心として一」『日本考古学』20
 西本昌弘 2007「行基設置の楊津院と河尻」
 『地域史研究』104 尼崎市立地域研究史料館
 藤本史子 2012「河辺郡の古代寺院について
 一伊丹廃寺と猪名寺廃寺を中心として一」
 『菟原Ⅱ 森岡秀人さん還暦記念論文集』菟原刊行会
 寺岡 洋 2012『ひょうごの古代朝鮮文化
 一猪名川流域から明石川流域一』
 * 「猪名部と秦氏は近隣氏族」 p.35

i) 越前^{あまの}の足羽郡や丹生郡では生活圏が共通している
 ii) 令制下の諸官司 (官庁) 所属の木工に秦氏と猪名部が共に見られ、
 木工は両氏の伝統的な職掌であった
 iii) 厩戸皇子^{うまののみこ}の妃の一人に位奈部橘王^{いなるべ}がいるが、妃の名前は猪名部氏が乳
 母を出したか、養育の世話をした由縁でつけられたと推測される。
 この妃が厩戸の死後に作らせたのが有名な「天寿国繡帳^{てんじゆこくしゆうちやう}」であり、
 制作総括者が秦氏である椋部秦久麻^{くらべ}であった
 iv) 猪名川流域の猪名部と秦氏の居住の重複
 などから、両者が近縁氏族であったと推測されている。

大脇 潔 2015「瓦からみた西摂の古代寺院」
 『地域研究 いたみ』44号
 大脇 潔 1999『鴟尾』日本の美術 392 至文堂
 * 猪名寺廃寺出土鴟尾については、「初唐様式の系譜」
 p.65~68